

The IYC International Women's Networking Event in Japan

18th January, 2011 14:00 – 15:00

The Chemical Society of Japan



Gender Equality Committee of the Chemical Society of Japan

Opening Address: Chair person Masako Sasaki, Prof. Emeritus, Ph.D.

The theme of the IYC is "Chemistry - Our Life, Our Future"



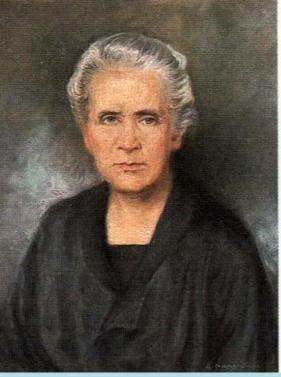
The theme of the IYC is "Chemistry - Our Life, Our Future"

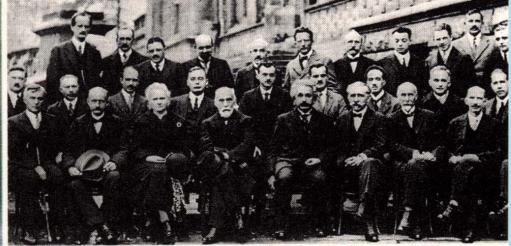
The year 2011 is 100 years since Madam Curie received the Nobel Prize for Chemistry.

We, women chemists in the world celebrate this achievement, and around 31countries participate the event of "Women Sharing a Chemical Moment in Time",

18th January, 2011.

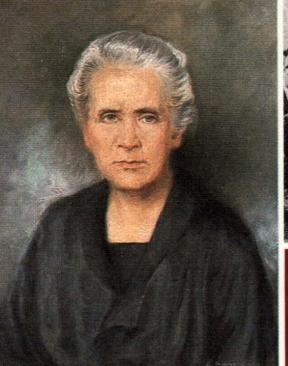


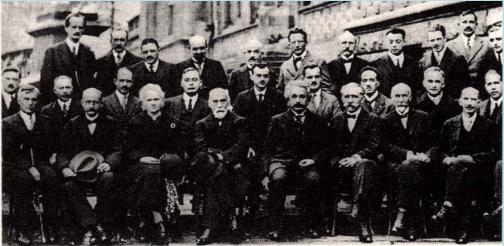




Maria Skłodowska-Curie 1867-1934







Maria Skłodowska-Curie 1867-1934

We celebrate the 100th anniversary of her Nobel Prize in chemistry, 1911. Her pioneer works are in nuclear chemistry, and the co-discover of radium "Ra" and polonium "Po".



International Women Nobel Award rate in chemistry, physics and physiology /medicine fields is only 2.4% until 2008.



International Women Nobel Award rate in chemistry, physics and physiology /medicine fields is only 2.4% until 2008.

International Comparison of Female Researchers' Participation Ratio 13.0% in Japan (2010) the lowest rank in 35 countries

> from "Women, Minorities, and Persons with Disabilities in Science and Engineering," published by the National Science Foundation (NSF).



Japan is promoting the support - encourage programs for women and young scientists, now.

 Supporting Activity for Female Researchers by the MEXT (The Ministry of Education. Culture, Sports, Science & Technology)'S
 Special Coordination Funds for Promoting Science and Technology
 JST(Japan Science & Technology Agency)'S
 PRESTO (proposal-oriented basic research promotion program) Projects, and the other programs

Our slogan is 202030 that means women's leader reinforce to 30% in science & technology field, especially in chemistry until 2020.





The IYC logo symbolizes "Chemistry"





The IYC logo symbolizes "Chemistry"



for Celebrate 100th anniversary of Marie Curie's Nobel Prize in chemistry, for Challenges, for Creativity, for Changes and so on. There is plenty to Cerebrate under the C of Chemistry. We add Cross-Coupling, double C. The 2010 Nobel Prize for Chemistry was awarded to Richard Heck, Ei-ichi Negishi, and Akira Suzuki.



We celebrate two Japanese Nobel Prize laureates in Chemistry 2010 for palladium-catalysed cross-coupling



Ei-ichi Negishi of Purdue Univ. US: Akira Suzuki of Hokkaido Univ. Japan Asahi News Paper: 6 October 2010

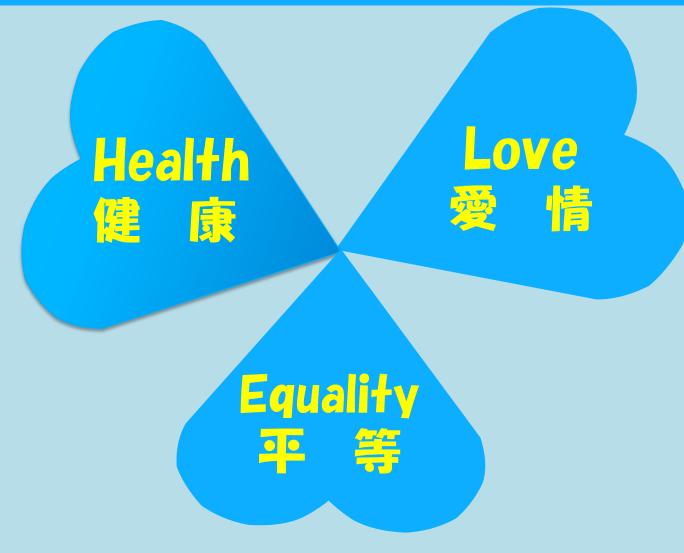


The Chemical Research History on Cross-Coupling in Japan, to the 2010 Nobel Prize

	···/-~	ル化学賞受賞者	f			A REAL PROPERTY AND A REAL
1960 年代	辻二郎● パラジウム触	媒を有機合成	反応に応用	(100	
	満呂木勉、 R.ヘック パラジウム触媒を使ったオレフィンの反応を開発					
1970年	山本明夫触媒サイクル素反応の研究			辻二郎 東京工業大名誉教持	玉尾皓平 一 理化学研究所	開田城⊙ 京都大名誉教授
1971年	J・K・コウチ(米、日系米国人) マグネシウム化合物と鉄触媒による有 機合成反応			Pd (基幹研究所所	
1972 年	R・J・コリュー マグネシウム化合物とニッケル触媒に			5 5	Zn	
	よる有機合成反応		村橋俊一	-0	= 4 AI 2	
	玉尾皓平 ②、熊田城 ③ クロスカップリングの誕生。マグネシウム 化合物とニッケル触媒		大阪大名		リングを開発	
1975年	村橋後一〇 クロスカップリングへのパラジウム触媒 の導入		# (根岸英一米パデュー	● 大特別教授	
	■頭健吉 銅とパラジウム触媒					
1976~ 1977年	根岸英一 5 ホウ素、アルミニウム、亜鉛、ジルコニウムとパラジウム触媒				OH)	
1977年	小杉正紀、右田俊彦 スズとパラジウム触媒			鈴木章③		a 発 満憲夫
	スティル	スズとパラ	ジウム触媒	北海道大名誉教	投ーティード	海道大特任教授
	●鈴木章 6 ホウ素とパラジウム触媒		檜山為次郎			
	檜山為次郎⑦		中央大教授	and the second se		
a a a a a a a a a a a a a a a a a a a	ケイ素とパラジウム触媒			敬称略。熊田さん	の写真は玉尾さん提供	
のイメージ根岸氏の例	。 炭末	ヨウ素 Pd パッジウム がついた炭素	亜鉛 20- 1 2パラジウ			飛び出して 次の反応へ

朝日新聞 2010年12月7日

Chemistry is for peace and happiness of all the people with three keywords!

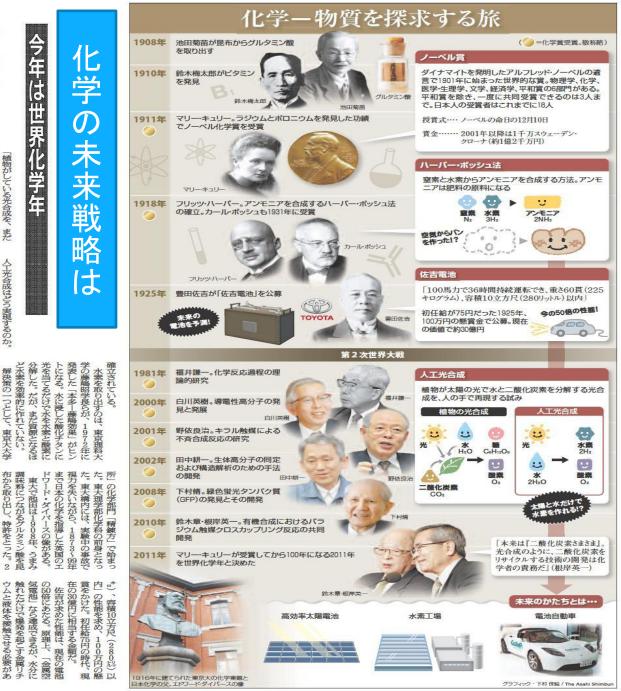




Chemistry is for peace and happiness of all the people with three keywords!



朝日新聞 2011年1月4日 朝刊 29ページ 東京本社



◎ 朝日新聞社 無断複製転載を禁じます。 ま並びに国際条約により保護されています。 すべての内容は日本の著作権

問される。自然科学系の受賞を狙っ一教授は、中国で講演するたびに質 できるようになったのですか」 て科学政策を進める中国は、 東大大学院理学系研究科の中村栄 その を研究するためにつくった「蕃書調 るようになったわけじゃない 861年、徳川幕府が西洋の学問 中村教授によると、日本の化学は

らパンを作った」と言われた。 れで農作物の収量は飛躍的に増え

「空気か

アンモニアは肥料の原料。こ

ー・ボッシュ法」を生み出

「日本の化学は1

「どうして急にノーベル賞を量産 米国に次ぐ2位だ。

鈴木梅太郎がビタミンを発見したの は100年以上前。一朝一夕にとれ ある。池田菊苗がグルタミン酸を、 「ノウハウ」が知りたいようだ。

0

次いでいる。ここ30年は英仏を上回 50年の歴史が ル

日本人のノーベル化学賞受賞が相 前 す 12 世 界 へ

年 後段は T

資源を作る方法だ。すでに、 て水素を取り出す。 た方法。 応は、すでに開発されている。た料になる一酸化炭素と酸素にする反 反応させ、メタノ 考えられているのが2段階に分け 源にして反応させるのは難しい 植物のように太陽光をエネルギ まず、 太陽光で水を分解し 水素と002と ルなどの有用な 化学製品の材

。人工光合

とでんぷんなどの糖を作り出す。 ルギーにして、CO2と水から酸素 植物の光合成は、 CO2を分解して、 太陽の光をエネ

50年に必要なエネルギ をつくって水素工場にすれば、 が多い砂漠に500**四方のプ 数%になれば実用化も見えてくる。 近年は0・2%まで高めた。これが 光をエネルギ 率的に利用できる新しい触媒の開発 取り組んでいるのが、太陽の光を効 ーをまかなえる計算だ」と話す 研究室の前田和彦助教は「日射量 タンタルなどの化合物を使い 0年代に0・03%だったのを -に変えられる割合が の3分の 20

年後、 た。 長義はエフェド 当時、

必要性を見越して1925年に公言 孝教授が注目するのは、 たが世界レベルの功績だ。 - ブの創業者の豊田佐吉が、将来の 東大大学院工学系研究科の水野哲

の高峰譲吉はアドレナリンを結晶化 を発見した。同時期に医学部の長井 いずれも受賞には至らなかっ 農学部にいた鈴木がビタミン リンを発見、 ベル賞は欧州色が 工学部

3時間運転でき、 した「佐吉雷池 重さ6貫(225 [100馬力で トヨタグル

いる。

さんいる。できるはずだ」 には世界をリー

と話して

ードする化学者がたく

0 00年になる前に実現したい 先見性を持った挑戦者。 うになってきた。理詰めの予測やコ 事 りをする時代になりつつある。 ンピュー えるようになるなど、近年は原子や 水野教授は つずつの振る舞いも分かるよ タ 水素の原子まで顕微鏡で見 上の試行錯誤でもの作 「佐吉は、高い理想と 公募から1 日本

実用化にはいくつも壁がある。



The Chemical Society of Japan で反応させてアンモニアをつくる シュは1910年ごろ、空気中の塞 資源を生み出したことがある。いず の可能性がある。 素に水素を、触媒を使って高温高圧 れもノーベル賞を受賞したドイツの

化学者はこれまでにも、

、空気から

100

素(CO2)を資源に変えよ アの合成のように、二酸化炭 作った」と言われたアンモニ 出すこと。「空気からパンを 植物の光合成を人工的に作り 次の大きな目標のひとつが る存在だ。その化学者たちの っとしている。 の化学研究は世界をリードす 化学賞を了人が受賞した日本 なる今年は「世界化学年」。 化学賞を受けて100年と ・キュリーがノーベ (東山正宜)

次の目標人工的な光合成 2 エネルギ るが、 ルギ 性を繰り返す 中から減らせ、 成でCO2を分解して資源を作れ 化石燃料に頼らない社会の実現 それでも太陽から地球に注ぐ の1千分の1。

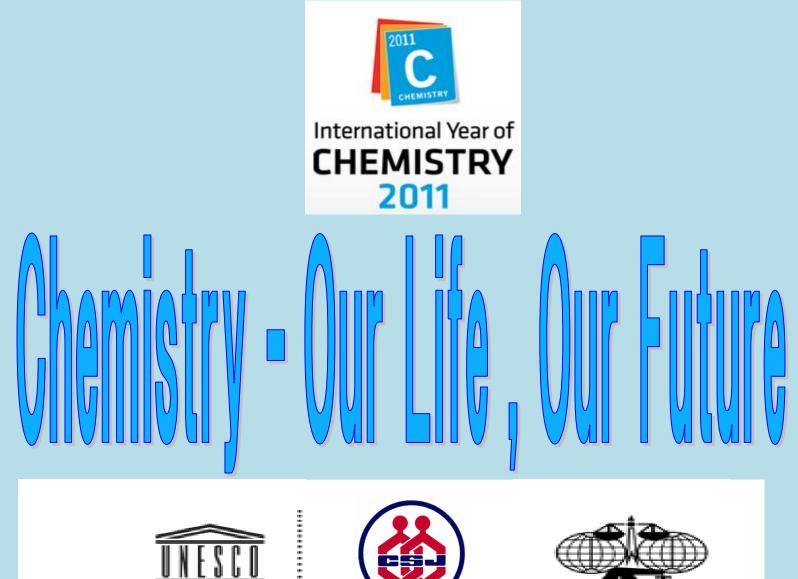
CO2をリサイクルできれば、 人工的にできないのは化学者の恥。 資源にもなる」

窒

の10倍を使って光合成して

地球の植物は、人間が使うエネ

の根岸英一さんは人工光合成の重要 欧米の研究機関のまとめによる ル化学賞を受けた米パデュ





100

ж.

.

ж.

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization



The Chemical Society of Japan



International Union or Pure and Applied Chemistry